

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2017年8月26日

文責：JUN

今年のセミナーは 「あきらめない！」で貫かれていた

今年の「授業づくり・学校づくりセミナー」は「あきらめない！」で貫かれていた・・・。
セミナー終了後、わたしの頭の中に湧きおこったのはそういう感慨でした。

1 「あきらめない」その①

不登校生徒が多く、日々トラブルも発生している、生徒の基本的な生活習慣ができていない、学力が低く、授業中寝ている生徒が何人もいる、そういった状況に対して教師たちはがんばっているのだけれど、なかなか状況は改善しない、そんな沈滞した空気を打ち破ろうと導入したのが「学びの共同体の学校改革」、授業を一斉授業による講義型からグループを多用する対話型に変え、生徒たちが夢中になって学び合う授業を目ざした、そして、教師たちによる授業研究会を行うようにした。ある学校のそういった経緯がセミナーで報告されました。

教師たちの授業が「協同的学び」に転換された効果は3年ではっきりとあらわれる、たとえば、不登校生徒は3年前の6分の1に激減し、生徒は授業中に寝なくなり、学校内は心地よい静けさに包まれるようになったということなのです。

いったい生徒たちはどう感じているのだろう、そう考えて行われたアンケート調査から、子どもたちの「聴く」学び方が育ち「学ぶことが好き」と答える割合が倍増したということが判明しました。この結果は、教師たちに確かな手ごたえをもたらしました。とは言っても、一斉授業型からじゅうぶん抜け切れているわけではなく、これからは学びの質が問われると考え、改めて取り組みへの意欲を高めようと気を引き締めているということでした。

こうした成果を受けて、その後、この取り組みが市全体に広がります。市の教育振興基本計画に「学び合い」に関する基本目標が設定され、「学びの推進事業」が持続的に行われるようになったのです。

この報告を聴いて、「学びの共同体の学校改革」を導入した、当時の学校長の決断が何よりもすごいことだったと思いました。沈滞しそれが常態化している状態に対して、いろいろな困難を覚悟して建設的な取組に舵を切ることにはたやすいことではないからです。すぐに結果が出るわけではありません。「協同的学び」とはどういうものなのか、それがどれほどの意味のあることなのか、教師たちが了解しているわけではありません。それ以上に、一般に人はそれまでずっとやってきたことを変えることに躊躇があります。変わらない安定性を求めたがるからです。しかし、子どもの状況がよくない

のは分かっている、けれども大きな転換には戸惑う、つまり、そこにあるのは一種の「あきらめ」なのではないでしょうか。

それに対して、校長の決断は「あきらめない」という意思表示になったのでしょうか。その揺るぎない決断を受けた教師たちは、当初は疑心暗鬼になったり戸惑ったりしたのでしょうか、その校長の強い信念についていくことになったのです。どの教師にも教師としての心があり、子どもをよくするということに対してはやらねばならないという思いがあったから教師たちも決断できたのでしょうか。

こうして一人の校長の「あきらめない」が、その学校の教師たちの「あきらめない」になり、それが市全体の「あきらめない」に広がっていった、報告を聴きながらわたしはそう感じました。もちろん、「学びの共同体」の理念にそれに応えるだけの実質があったから実現したことなのですが、その舵を切った校長の見識と英断に強く心を打たれたのでした。

2 「あきらめない」その②

当然のことですが、「授業づくり・学校づくりセミナー」では、いくつもの実践報告がされます。そこには、毎年のことですが、教師たちの「あきらめない」意志が強く反映されています。聴き合うかかわりをつくる「あきらめない」、子どもの没頭を引き出す課題づくりに対する「あきらめない」、学びの深まりの実現を目指す「あきらめない」、そして、それはすべて「授業づくり」の「あきらめない」なのです。

そのなかで、もっとも困難で、もっとも大切なのは、いろいろな困難を抱える子どもから学びを引き出し高める「あきらめない」です。それは、子どもが何かの事情で「あきらめて」いることが多いからです。つまり、教師の「あきらめない」は、あきらめている子どもから「希望」を引き出すためのものなのです。

今年のセミナーで、強く心に残ったのは、難しい状況の子どもに対して、教師が強い思いを抱いて温かく、丁寧に、その子どもの状況に寄り添うように接することの大切さでしたが、そしてそれ以上に、そういう子どもの「学ぶ希望」は、仲間との「協同的かかわり」によって可能になるということでした。ある教師は、「私ができないことが、子どもたちのかかわりでできるようになりました」「『学び合う学び』はすごいです」「『学び合う学び』は人権教育そのものです」と熱く語ってくれました。寄り添う子どものすがた、そのことによって生まれた子どもの学びの事実、それは、教育の可能性、子どもの可能性を参加者に強く感じさせてくれました。参加者の皆さんのアンケート用紙に、何人もの方がその感動を記されていたのでした。

教師の「あきらめない」が子どもたちみんなの「あきらめない」を生み出し、困難を抱えた子どもの「希望」を引き出し、学級みんなが「あきらめない」ことの大切さに抱く、それが可能になるのが「協同的学び」「学び合う学び」なのだと改めて感じ入りました。

3 「あきらめない」その③

セミナー二日目の午後の最後は、恒例の佐藤学先生の講演です。その講演の前に、今年もいくばくかの時間があり、そこでわたしが「<学び合う学び>はケアし合う関係で生まれ、ケアし合う関係をつ

くる」という話をさせていただくことになっていました。それは、このセミナーで、講師5人のうちの元小中学校教師3人執筆の本を出版することができたことから、3人がそれぞれの話をしようと計画していたからでした。小畑公志郎さんと佐藤雅彰さんは一日目に話をされました。そして、わたしがトリを務めることになっていたのです。

セミナーが近づいたある日、出版された本『授業づくりで 子どもが伸びる、教師が育つ、学校が変わる～「授業づくり・学校づくりセミナー」における協同的学びの実践』に掲載される佐藤学先生の「序文」が届きました。それを読んで、わたしはなんとも言えない感慨深い思いに浸りました。それは、佐藤先生がセミナーの歩みを記すとともに、そのセミナーを主催してきたわたしたちの会「東海国語教育を学ぶ会」の歩みと、その歩みに深い影響を与えてくださった稲垣忠彦先生、そして、わたしが若い頃から師として仰ぎ学んできた斎藤喜博先生、氷上正先生のことに触れてくださっていたからでした。

序文を読み進めるわたしの心は、一瞬にしてわたし自身の教師としての足取りをたどる回顧の世界に引き込まれていきました。そして、セミナーも、この本も、すべて書いてくださったこの足取りの結果として存在するのだという思いが湧きおこりました。それはなんとも言えない感慨でした。

わたしは、佐藤先生の序文を何度も何度も読みました。そうするうち、この序文が掲載される本が出るセミナーで、斎藤喜博先生から何をどう学び、氷上正先生から何をどう学んだかを語らなければならないと思うようになったのです。

わたしは、わたしの持ち時間を15分増やし45分にしてもらいました。そして、当初予定していた内容の話を10分強に縮め、そういうケアのある「学び合う学び」までの歩みとして、若い頃からのわたしの経験を語らせていただくことにしたのでした。

わたしが話した回顧談は次の6つでした。

❶ 「あじさい」という詩の授業の記録に対して斎藤先生のコメントを受ける（29歳）

読みの基本はイメージを描くことという根本的なことを学ぶとともに、授業づくりを学ばなければならないというはっきりした自覚が芽生えることになる。

❷ 「まんさくの花」いう詩の授業を報告し斎藤先生の指導を受ける

1時間の報告時間において斎藤先生の指示で6度の音読を行う。そのことにより、ことばに触れる音読の大切さを実感することになった。

❸ 「ふるさとの木の葉の駅」いう詩の授業を報告し斎藤先生のコメントを受ける

斎藤先生と氷上先生により、「木の葉の駅」という題名のもつ重みが示されるというドラマティックな忘れられない体験をする。

❹ 「ごんぎつね」の授業を氷上先生に見ていただきコメントを受ける

氷上先生に初めて授業を見ていただき、子どもの読みに寄り添って学び合う授業の大切さを学ぶ。

❺ 「靴下」の授業を佐藤学先生に見ていただき指摘を受ける

オペレッタの取り組みで子どもとの間に亀裂が生じている中での授業。この後、亀裂の原因に正面から向き合うことになり、それが「学び合う学び」につながる。

❻ 子どもとともに読む「学び合う学び」の誕生（41歳）

佐藤先生に見守っていただきながら、子どもの学びがみえる教師、子どもと

もに読む「学び合う学び」を目指すことになる。

わたしがこうした話をすることにしたのは、前述したように、佐藤学先生の序文に刺激を受けたからです。けれども、セミナーが終わったいま振り返ってみて、わたしも、「あきらめない」ということを話していたと気づいたのでした。それは、一人の教師として、授業づくりを「あきらめない」、自分磨きを「あきらめない」ということでした。わたしは、教師が本気で自分を変えようとするときは、二つのケースしかないと思っています。一つは、強い憧れを抱いたときです。そして、もう一つは、大変な挫折を味わったときです。わたしが話したことにはその二つともが存在しています。まさにわたしは、憧れと挫折の狭間で「あきらめない」でやってきたのでした。

4 「あきらめない」その④

「学び合う学び」こそ、そう思い実践する教師は、わたしが取り組み始めた30年前とは比べものにならないほど多くなっています。その一方で、どれだけ良質の授業を目にしても、どれだけ学ぶ子どもの表情に出会っても「学び合う学び」を実践しようとはしない教師がいることも事実です。人はそれぞれであり、考え方は千差万別なのですから、それは仕方のないことです。

しかし、3月31日に告示になった新学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」の実現が強調されたことにより、状況は「学び合い」の実現に向かっています。教えられる学びから、子どもが探究する学びへの転換がうたわれ、その際、子どもが対話し合って学ぶことが必須になってきたからです。今後は、ほとんどの学校で子どもと子どもが学び合う授業づくりに取り組みられていくでしょう。

それは、ずっと「学び合う学びこそ」と言い続けてきたわたしとしては喜ばしいことです。ただ、ずっと取り組んできたからこそ、その実現は安易なものではないことを知っています。ですから、一時の流行のように「学び合い」「学び合い」の大合唱になり、形だけの学び合いが行われ、「深い学び」どころか、にぎやかなおしゃべりだけのグループ、まるでレジャーランドに行ったかのような騒がしさが生まれることを危惧します。そうならないために、「主体的・対話的で深い学び」が登場した今こそ、何が本質的に大切なのか、どういう学び合いが必要なのか、そのため教師はどうしなければいけないか、それらのことを語り続けなければいけないと思っています。

それは、「学び合う学び」の実現を「あきらめない」ということであり、「学び合う学び」によって、すべての子どもの学びの実現と、すべての子どもに共生の心をという願いを「あきらめない」ということだと考えます。

もちろん、一人の人間の成せることはちっぽけなものでしかありません。そういう意味で、「あきらめない」は常に「あきらめる」とこと隣り合わせです。そんなとき、思い出すのです。『蜜蜂と遠雷』という小説に書かれていた「一瞬と永遠」という言葉（「学びのたより」5月号で詳述）を。そこにはこう書かれていました。「この一瞬一瞬、音の一粒一粒が、今たまたま同じ時代、今この時に居合わせた人々に届く」と。

わたしたちは一人ではないのです。「あきらめない」心は、必ずだれかに共有され、だれかに受け継がれ、そのだれかの「あきらめない」もまたまただれかに受け継がれていくのです。今年のセミナーで生まれた「あきらめない」も、これから何人もの人に受け継がれていくにちがいありません。